

里山と民家体験が子どもたちの感性を育む

木更津社会館保育園園長 宮崎栄樹さん

子どもたちに 木更津の森を体験させたい

私が園長を務めている木更津社会館保育園は、一九三八年（昭和十三年）に設立された長い歴史のある私立の保育園です。今は一四〇名の子どもたちを受け入れています。
私は一九七八年に園長になったのですが、就任してから二〇年の間に、自分が目指した保育園ができあがった、目標が達成されてしまったと感じていました。
新しい何かを探して外に目を向けたときに、



「そうだ、自分も育った木更津の森へ入って行く」と思ったのです。そして、一九九九年から里山保育を始めました。今年で一一年になります。

本園は千葉県木更津市内の港の近くにありますが、里山保育をする分園は、そこから三キロほど山側に入った里山にあって、四、五歳児を年間七〇日ほど連れて行っています。子どもたちは三キロの道を歩いて往復するのです。最初は、ただもっぱら子どもたちと森の中で過ごすことが目的でした。泥んこになっても、多少、傷を作っても大人はほとんど手

を出さずに見守るだけです。

ところが、里山保育を始めたなら、自然と触れ合うことが少なかつた子どもたちが、あらゆることをどんどん吸収していくのです。教えないのに、オタマジャクシがどこにいるかわかる、虫のことも知っている、どの植物の実が食べられるかわかる、自分たちで遊びを発見する、子どもたちにとっては、山中が遊び場であり、学ぶ場になったのです。
そのことで私は、健康な体と豊かな感性を育てるには、森での保育が大切だと確信しましたね。

宮崎栄樹（みやざき・えいじゅ）

1948年千葉県生まれ。1978年より木更津社会館保育園園長を務める。1999年より保育園分園の自然の中で「里山保育」を始める。約1万坪の敷地内に里山保育の拠点である「森の家」と築100年余の民家「佐平館」がある。里山で五感を育てるその取り組みはNHKの特集番組や記録映画の上映などで注目されている。活動は齊藤道子著『里山っこが行く—木更津社会館保育園の挑戦』（農文協）に詳しい。

民家でアニミズムの感覚を育てる試み

分園の里山は広さが一万坪ほどで、そこには築一〇〇年以上の古い民家を改修した「佐平館」という建物があります。そこで子どもたちは、里山を駆け回り、民家の中では日常は経験できない異体験をさせられます。

子どもたちは、三歳になると、佐平館へ行きます。絵本の世界のような、何だか怖い感じを体験させるのです。

一、二歳児は葉っぱのお面でも怖くてパニックになってしまふ。いっぽう、五歳児になる

と私が顔に付けたカッパのお面を見ても怖くなくて、「このカッパは頭が禿げてる、声が園長だ」と言ってみ破ってしまいます。それが三、四歳児ですと、「保育園にはカッパがいるらしい、つかまえようか」と全身全霊で考えるのですね。

そんな三歳児にカッパどころか、鬼やお化けが出てきそうな佐平館での体験をさせるのです。一年間それをやっておいて、四歳になったら今度はそれを忘れさせます。そのために、四歳児は佐平館へ入れません。そういう過程を経て五歳になったら、佐平館に再登場させます。そうすると、子どもたちは「あれ、ここ来たことあるなあ」とあらためて佐平館を見直します。忘却期間を置いて、もう一度体験させることでしっかりと記憶が強化されるのです。印象を強めるためにあえて一旦映像を切ってしまう。そうすると再会したときに「知っているのに知らない、初めて会ったのに懐かしい」というとても素敵な感覚が生まれます。

この体験を通してこそ、屋根裏でポトンと音がしたら怪物がいるのではないかしらとか、闇夜を見てお化けがいるかもしれないと思ひ姿まで見えるようになるのです。

今は、闇夜を見て何も見えない子どもが多いですね。真っ暗な闇夜を体験していないから、わからない。だからお化けも想像できません。

ファンタジーの世界に遊ぶことができる三、四歳児、うそを見破ることができるようになる五歳児。私は佐平館で、アニミズムの根本になる体験を子どもたちにさせてやりたいと思っています。

（次ページに続く）



▲大に想も
人き不い
でくなが
らている
れ館
▶名の
となつ由
館っ脇左
「佐平
の平の
入った土蔵



民家にはメッセージがある

私はもともと実家が寺で、海の近く、町、里山にある三つの寺の住職もしており、ずっとこの木更津の里山で過ごしてきました。この地域は、昔からの家も多く、古民家は特別懐かしいものではありません。でも土蔵が壊されていく、古民家がなくなっていくというのは淋しいし、それを止めたいと思います。この保育園に来ている子どもたちが、昔からの家を知らないということは、とてもかわいそうだと思うし、不安も感じます。

佐平館の建物の魅力は、まず大黒柱です。大黒柱には引力がありますね。樹齢何百年という木には人を引きつける魅力があります。この家を支えているものが見えるのは、とてもいいと思います。だれかが責任を持って建てたというのが分かります。「この家を支えているよ」というメッセージを大黒柱は伝えている。大黒柱のない家なんて家とは言えませんよ。それから梁ですね。そして、その骨組み。

もつとすごいのは、曲がった土蔵の梁。今だったら絶対使われない、ゴミにされてしまうような曲がった木を使った造りです。それができるのは、造り手が自然の与えてくれているメッセージを受け止めることができる人だからです。昔の人は、へそ曲がり、根性曲がりのどうしようもない木を、家の宝を守る土蔵の梁として使っていたのです。

そんな梁を子どもたちに見せてやりたい。「こんなに曲がっている木でも、活躍できるところがあるんだぞ」とね。今は、まつすぎな柱ばかりでしょ、人間もまつすぎな人ばかり。だから、根性曲がりは肩身が狭い。もつたないことだと思えますね。

以前は、家を造ること自体に私たちの精神が反映されていました。茅葺きの屋根は何年かに一度葺き替えなければいけない。だから、瓦やトタンに替えてしまうけれど、実は面倒だからこそあえて人は茅葺きにしてきたのだと思います。何年かに一度は、人々の手を借りて葺き直すようにしようと。人が造ったものというのは、だれかの意思があり、その意思を伝える他の人たちの志があつて保たれてきた。放っておけば崩れてしまう。支えるのはその志を引き継ぐ人たちなのだと思います。

今はそういうものが一切なしで、造つたものは永久に自動更新されていくような安易さを求めてしまっています。

だから、民家再生は資源を大切にすることというよりも、もつと大事なことをしているのだと思います。大黒柱を残そうというだけで、「今の住宅の構造はノーだ」というメッセージを伝えていくことになるのです。

伝統を重んじる暮らしを身につけさせる

今は、応接間がない家、玄関が南側がない家が多いですね。お客様を迎える気持ちがないわけです。外に対して拒否的で無関心というのが今の家づくりです。縁側もないですね。庭と家が交流することを遮断してしまっています。そんな生き方でまともな人間が育つとは思えません。家の中と外が繋がることが必要としないで、どうやって生きていくのですか。孤立して生きていくことに将来があるとは思えません。今の家は日本の風土には合わない造りですから、いずれ廃れるだろうと思います。きつと何十年後には日本の伝統的な住宅に戻ると思うのです。

子育ても家も同じです。伝統を重んじながら生きていた時代の暮らしを見直し、子どもたちに家の中と外が繋がる暮らしを身につけさせていくことが大事だと思っています。

フランス民家協会から 姉妹提携協定書が届きました



JMRAは昨年の「フランス民家を訪ねる旅」を通じて、フランス民家協会と姉妹提携を結びました。このたびフランスより協定書と写真が届きました。代表のミッシェル・フォンテーヌ氏より、両協会の相互協力と発展を願うとのレターが添えられていました。

JMRA事務局に飾ってあります。ぜひご覧ください。



フランス民家協会のみなさん